

外城遺跡 —第4次調査のあらまし—

外城遺跡は、石岡市貝地一丁目5189番ほかに所在する遺跡です。鎌倉時代から戦国時代の城館(石岡城、外城)で、現地には今でも堀や土塁が残っています。

また、奈良・平安時代の土器や瓦も散布し、国分寺以前にさかのぼる軒丸瓦も採集されています。「フンダテ(古館)」「カンドリ」という地名も残ることから、古代常陸国の茨城郡の役所(郡家、郡衙)に推定されています。

これまでは昭和60年度に部分的な発掘調査が行われただけでした(第1次、A・B・C地区)。市教育委員会では、平成30年度から遺跡の範囲や内容を確認する調査を開始しました。平成30年度は微地形測量と地中レーダー探査を行いました(第2次)。令和元年度は微地形測量と探査を継続するとともに、第2次調査の測量・探査成果をもとに発掘調査を行い、中世の堀跡等を確認しました(第3次、D地区)。

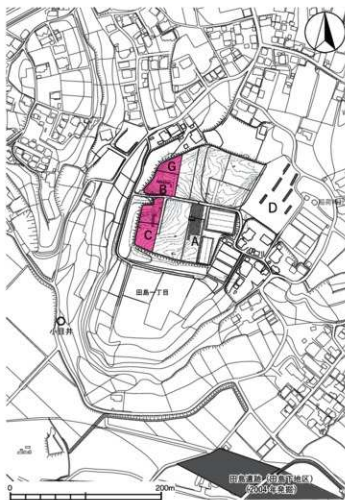
令和2年度は遺跡西側(B・C・G地区)の微地形測量と地中レーダー探査を行いました(第4次)。地中レーダー探査(GPR)とは、電磁波を地中に送り、その反射をとらえることで、地中の状況を探る方法です。土質の違いなどによる電波の伝搬速度の差や、土質の境界面などによる反射状況から、遺構の存在や規模を推定できます。今回は以下のような遺構を推定することができました。

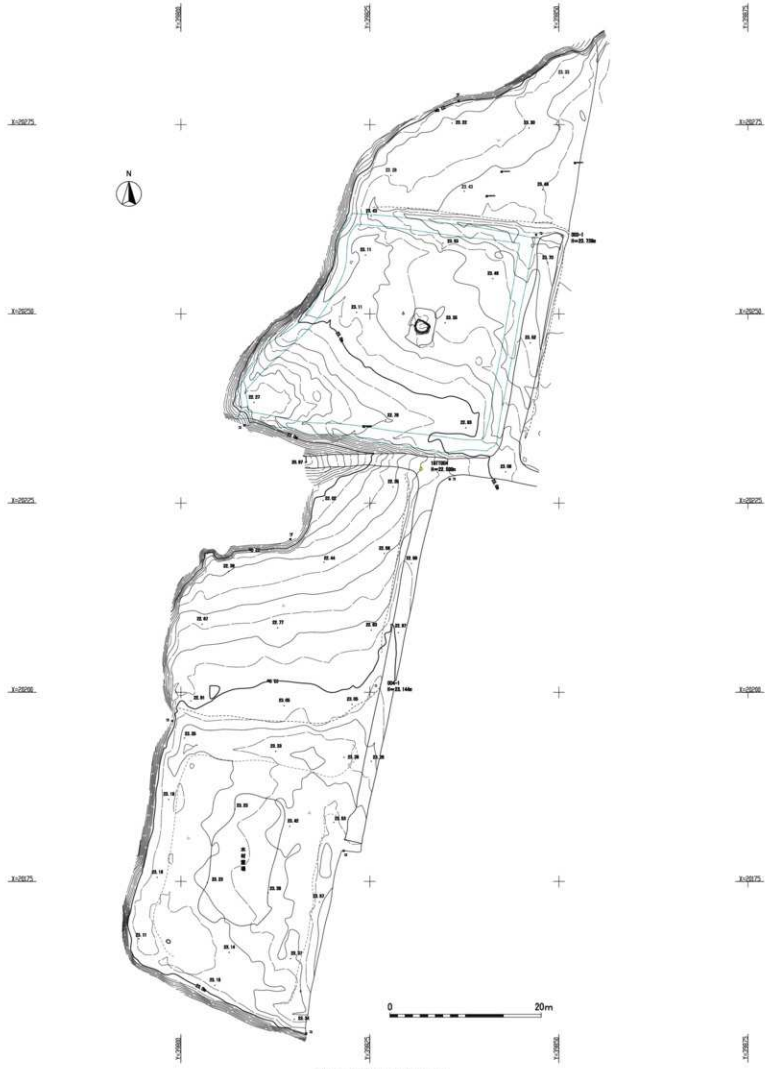
○ 建物基壇

方形で東西12~15m、南北10~14m程度の強い反射反応のまとまりがいくつか見つかりました。建物の基壇の可能性が考えられます。

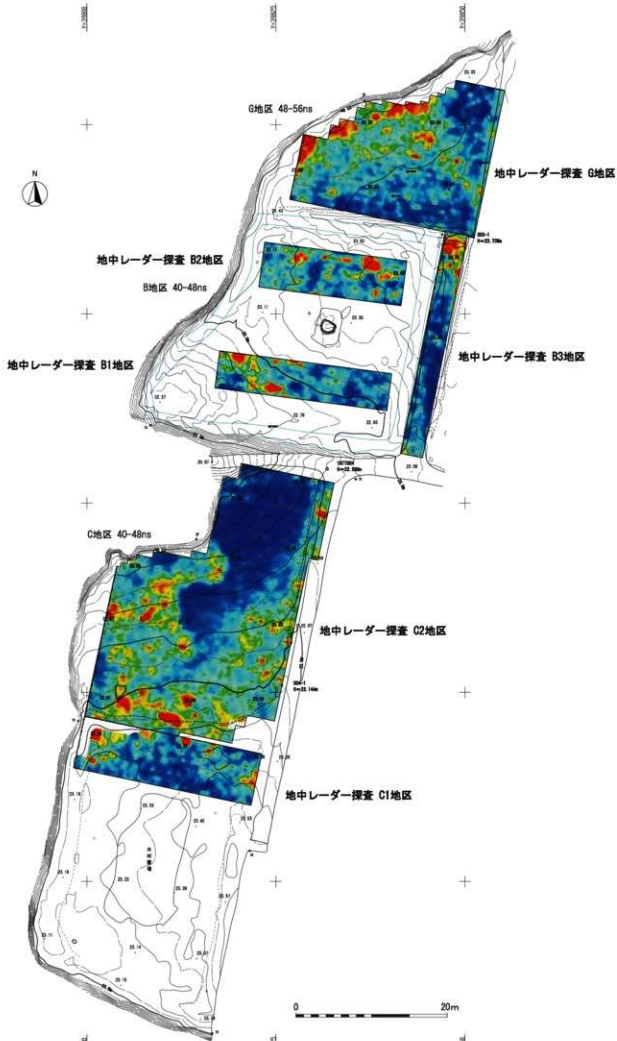
○ 掘立柱建物

点状の強い反射反応も複数見つかっています。特にG地区で確認したものは、東西・南北方向に並んでいることから、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられます。

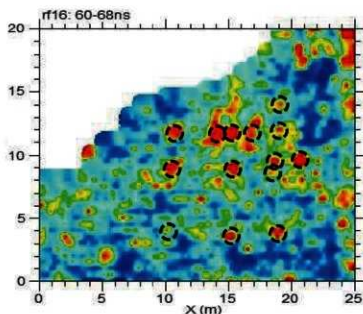
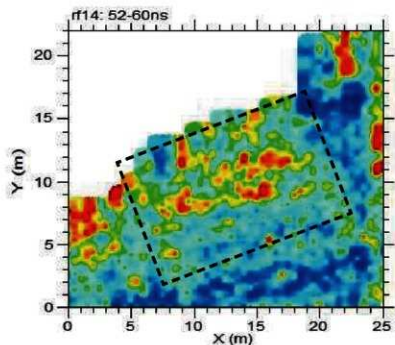




第4次調査 測量図

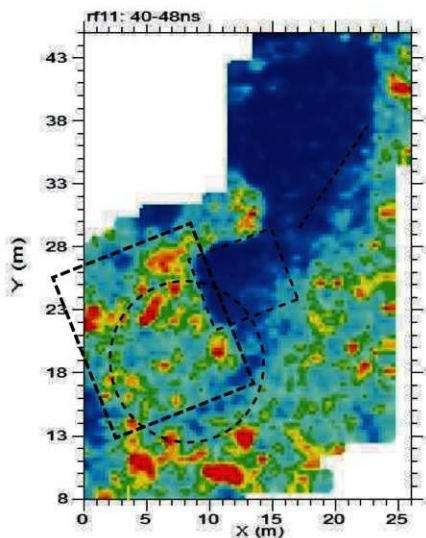


第4次調査 地中探査タイムスライス図



▲G地区 地中レーダー探査反応

東西 15m、南北 10m 程度の方形の反射反応（黄色や橙色）のまとまりが存在します（左図）。建物の基礎の可能性が考えられます。それより深い箇所の反応（右図）を見ると、小さな強い反射反応（赤色や橙色）が点在します。東西・南北方向に並んでいるようで、掘立柱建物の柱穴の可能性がります。



◀C2地区 地中レーダー探査反応

東西 12m、南北 14m 程度の方形の反射（黄色や橙色）のまとまりが存在します。方形や円形の透過反応（青色）と重複していますが、それよりも古い反応で、建物の基礎の可能性が考えられます。